

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回二日發行）
昭和二十年二月廿日印刷 日本・昭和二十年三月一日發行

第十一卷 第三號

淨

土

三 月 號

目次

表紙・卷頭カット……………中島 保

國民精神の闘ひ……………（卷頭）

淺春合掌……………

……………吉田絃二郎（三）

書生謳歌の頃……………

……………大村 桂巖（八）

信仰相談……………

……………中村 辨康（二二）

他力信心の建設力……………

……………下村 湖人（六）

滅私奉公に徹す……………（二三）

淨土宗の鍊成思想……………

……………大野 法道（二四）

編輯後記……………（二六）



保



こちらが苦しい時には、それ以上に敵も苦しいといふのが戦争の原則である。B 29を初めて見た都民の中には、キラ／＼銀色に光る機體を眺めてきれいだといった者があつた。しかしB 29は自重の關係から迷彩を施したくも出來ずにあるので、敵にとつての弱點をこちらでは見事だと感心したわけである。また物量を誇る敵は兵器彈藥の量で戦ふといふが、巨體のB 29七メートルもある尾翼の昇降舵は布製で、塗料によつてジュラルミンと見せかけてゐる。更にまたわが國で荒鷲といへば潑刺たる若櫻を思ひ浮べるのであるが、比島で撃墜された敵飛行機の搭乗員は四十歳以上の者が多いといふ。わが國とて樂ではないが、敵米國の物と人との苦しみ方は相當なものに相違ない。

新年度豫算が千八百億圓といふ老大なものだを知つて、國民は一切を擧げて國家に提供するのは勿論のこと、生易しい努力ではすまぬと覺悟をきめてかゝる要がある。國民所得が九百億圓だといふのに、貯蓄目標が六百億圓以上と見られ、消費資金が百十五億圓だと云ふ。國民一人々々が今からうんと勞働を強化し、貯蓄し、辛苦に耐へる決心をしなくてはならぬ。擊王遠藤大尉の言葉「戦争は絶對です。困難や苦勞は當然なことです」はまさに至言である。

申すまでもなく現下の戦争はその國の思想と經濟に礎をおく以上、一億が一億ともに楠正成たり吉田松陰たるべく努力する心構へで生きてゆきたい。しかし事實は正成や松陰になれる筈もないから、萬人が少しでもよき精神に生き、戦勝に通ずる生活に徹するやう努めればよいので、ここに國民の精神、思想の問題が重要になつてくる。お互に樂でない生活をやり抜く魂の據り所が大切になつてくる。幸ひわれ／＼は信仰によつて辛苦に耐へ、明朗な生活を營むことを修養してゐる。ますます勇猛心をふるひ興さうではないか。



淺 春 合 掌

吉 田 絃 二 郎

清譽上人、大島徹水大僧正が京都で御遷化なされた。誠に寂しいことである。數年の間、毎月朔日には武藏野の茅屋をお訪ね下さるのを例としたので、いつも朔日が来るのが待ち遠しい思ひであつた。

あの巨軀を擁して、床の前にどつかとお坐りになつたお姿はいかにも駘蕩たる春風につままれた感じであつた。いつかは突然のお越しで何もなかつたので、お齋に何をお上げいたしましたせうと申上げたら、「餛飩かけを」との御所望であつたので、餛飩かけ二つだけをお上げしたら、大變およろこびであつた。一生涯きびしい戒律を持してをられたので、いつもわたくしの裏の野菜物はかりさし上げたが、柔かなやつがしらなどは、京都の野菜のやうだと仰せられて殊におよろこびであつた。四五月ごろになると裏の竹山の筍を掘つてお上げしたが、或る年の筍のころ、食卓にお坐りになつてから、大きなお聲で「しまつた!」と仰せられたので、驚いて「御前様、どうなさいました?」とおたづねしたら「入れ歯を忘れて来た」とのお言葉であつた。

「いや、お齒がなくとも大丈夫でございます。宅の筍は掘り立て、柔かでございますから」と申し上げたら、お箸をお付けになり、「成る程これは柔かだ」とお笑ひになつたとがあつた。

坂根翁に就いては御心の底から感謝してをられ、御在世中に坂根翁の事蹟を一冊の本に纏め上げたい御心願であつたが、その御志の達せぬ間に御遷化になつたことは洵に残念であつた。

御話は無盡蔵といつてもいゝくらゐで、維新の際の京都に於ける志士の話などもよく御存じであつた。西郷、木戸、岩倉等のお話もしばしば承つた。わたくしの狭い荒れ果てた庭が京都を思はせると仰せられ、殊に裏の竹山が嵯峨あたりを想はせるといつて、眺めておゐでになつたこともあつた。自然お話は京の春秋に轉じ、「一度是非あんたを京都の××庵に連れて行つて、一晚泊まつて来よう。秋のころがよい」と仰せられたことも再三であつた。仁和寺の奥あたりの庵であつたと思ふが、今は名も忘れてしまつた。

無隣庵にも伴れて行つて茶を喫まして上げたいとも仰せられた。御心の底から京都が大好きで、「京都の人は信心が厚く、眞實で、十の言葉が十とも誠である」と仰せられた。あれほど好きだつた京都で御遷化になつたことはせめてものなぐさめであつた。

數年前わたくしが知恩院の細井先生に案内されて獅子ヶ谷の法然院にお詣りしての歸りに京都家政女學校の方へ上人をおたづねすると、御前さまは「細井さんが案内したか。法然院でもてなしたかな」と問はれた。細井先生が「えゝ、すゐぶん御馳走になりましたよ」と答へられたら、上人は「わしが案内すればもつと御馳走になれたに」と言つて哄笑せられた。校長室で京の菓子と青森の林檎の馳走にあづかつたが、富岡鐵齋翁の魚藍觀音の繪を見せていたゞいた。非常に大幅なもので、大した作であつた。鐵齋翁とはきはめて御昵懇の間柄だつたので、或る時、鐵齋翁の令息が歿くなられたをり、上人は導師の役をお勤めなされた。後鐵齋翁が「御布施を進ぜたいが」と話した時、上人は「布施は要らぬから、學校の床の間に懸ける觀音さまを描いてくれ」と頼まれた。お易いことだと言つて鐵齋翁は學校を訪れた。案内されたのは家政女學校の大講堂であつた。流石の巨匠もちよつと驚いたといふことであつた。「表装をして繪を持つて來てくれた鐵齋が何といふかと思

ふたら、大島さん、これや、お布施を上げた方がよつほど廉うついたといふて笑ひよつた」といつかお話になつたとがあつた。

或る時わたくしは生死の事について御考をおたづね致したことがあつた。

「わしはいつ死んでも別に悲しいとも思はぬが、別に死にたうもない。」と仰せられた。

増上寺の御居間は相當古く、日中でも暗いお部屋であつた。近侍の人々はたび／＼景光殿の方へお移りになるやうにとおすゝめしたが、いつも御諾きいれはなかつた。「この部屋には行誠上人がおゐでになつたのぢや」と仰せられて長い間、明るいお立派な景光殿に移ることをおよろこびにならなかつた。

上人はいつも墨染の御法衣でお越しになつた。上人には公式の場合にお見かけすると何處となしに冒しがたい達摩の威嚴があつた。わたくしの家などへお越しになつて卓を同じうして語られるをりのお顔は子供に取り巻かれた布袋と申し上げていゝやうな慈眼柔和さがあふれてゐた。去年、鵜沼の慈教庵へ、和田正系博士といつしよに上人を訪ふやうにこのことであつたが、わたくしが病後の疲勞のため、つひにお訪ねもしなかつたが、今となつては残念でならぬ。去年の春ころであつたらうか、自動車とてもない

時代ではあり、電車に召してお越し下されたのを、瀬田の停留場に御見送り致したのが、最後のお別れであつた。

上人は六尺豊かの堂々たる御姿であつたが、昔は痩せてをられたらしい。晩學の方で、中學にはひられたのと徴兵検査とは同じ年であつたと、よく語つてをられた。徴兵検査官が「お前は咳の中に血が交つたのを吐くぢやらう。間違ひのない肺病ぢや。早く歸つて養生せいと言ふた。そこでわしは暑中休暇になると參州？のお寺に行つた。そして朝は眞つ暗な中に起きて、本堂から山門まで二丁ばかりのところを一人で掃いた。夜は寺から十八丁ばかり離れた海岸まで歩いて行つて、深呼吸をやつた。そして暑中休暇の間に見事に肺病を治してしまふた」と仰せられたことがあつた。

上人は或る時わたくしに繪を書いてくれと仰せられた。

「どんな繪を描くのでございますか」とお問ねしたら、「わしは昔鐘を二つ手に入れたので、二つの鐘を振り分けに擔いで、東海道線の或る驛で下りて、一つは參州の寺に納めその足ですぐ汽車に乗り、夜の十二時米原驛に下りた。米原驛から夜中歩いて夜の明けるころ、寺へ着いて件の鐘を置いて來た。芝翫下駄を穿いて、笹が繁つてゐるやうな道を徹宵歩いて行つた。前の方に風呂敷包みを、背の方に鐘を擔いで行つた。その時のわしの姿を描いておくれ」との

仰せであつた。そこでわたくしは重ねて問うた。「その前の風呂敷包みには御經の本でもはひつてをりましたか。」そして「いや、餘所で貰うた林檎や蜜柑を包んで置いた」とのお言葉であつた。

×

このころ友人が芝公園の山内で見え來た話。板垣退助翁の銅像が供出されることになり、首と胴は別々に切り離されて無残にも地上に轉がされてあつた。友人は氣にかゝるので尙ほ一度現場に行つて見たら、今度は首の上には紙が懸けられ、線香が焚かれ、阿彌陀經が供へてあつた。

この友人の話聞いた日からわたくしの心は明かくなつた。日本の國民性の裡に潜んでゐる尊いものが、まだ生きて流れてゐることを信ずることができたからである。

またわたくしの家を訪ねて來た一婦人は、民にかゝつて死の苦しみ狂ひ立つてゐる一疋の犬を救ひ出すために男たちが恐ろしがつて手を出すこともできないのを、自分ひとりで二時間もかゝつて、救ひ出した。

「あたしは自分の片腕を食ひ切られてもいいから助けてやらうと思つてやりました」といふかの女の言葉を尊く、ありがたく聞いた。



他力信心の建設力

下 村 湖 人

すべてが苛烈凄惨で、瞬刻も静を守ることの出来ないやうな今の時代こそ、萬人が心の至深所に獨坐して静を守り、ちつと己を省みるべき時である。

すべてが不足と不便とに取り圍まれ、耐乏忍苦の生活がいよいよその色を濃くして行く今の時代こそ、萬人が自己の生活のゆたかさを深く噛みしめ、それに合掌する心になるべき時である。

そして、すべてに自力が要求され、自力の結集のみが一切を決定するかのやうに思はれてゐる今の時代こそ、萬人が自力の限界を知り、大いなるものの攝理に眼をさますべき時である。

この三つのことを、私は前線から歸つて來た一勇士との茶話の間から學ぶことが出來たやうに思ふ。

ある夜、その勇士は私に語つていった。「夜襲に出發する直前の静寂の中で、一切を忘れて自分を見つめることの出來た私は、生涯のうちでも、最も幸福な私でした。それは、私の心が私自身に集中することによつて却つて限りなく擴がること出來たやうに思ふからです。私は、その時、私がそれまで私だと思つてゐたものが、實は、眞の私でなく却て、それを蔽ひかぶせてゐる塵あくたのやうなものであることに氣づきました。私は、その塵あくたの底から眞の私を拾ひ出した時これまでとはまるであつた智慧と勇氣とを同時に惠まれたやうな氣がしたのです。眞の私は永久に死なない。私がこれまで死ぬと思つたのは、眞の私を蔽ひかぶせてゐた塵あくたに過ぎなかつたのだ。さう私は思ひました。そして、敵陣に躍りこむほんたうの覺悟

が私に出來たのは、たしかにその時だつたのです。」

また、ある夜、その勇士は、飲みかけた茶碗の碗を下に置き、ちつとその中を見つめながら、いった。「

「一行五名、燒きつくやうな岩壁そひの道を五里ほど歩いたところ、道から一尺ばかりの高さの岩の裂目から、ひとところ水がしみ出てゐるのが見つかりました。すると、ひとりの兵隊は飛びつくやうにそこに走つて行つて、そのしめりに唇をあて、舌をへろへろと動かしてはじめました。それはちやうど、赤ん坊が母の乳房をさぐりあてた時の恰好そつくりだつたのです。ほかの兵隊たちもすぐそれにならひました。四名の兵隊は、それから永いこと、まるで母犬に抱かれたひと腹の犬の仔見たやうに、額と額とをぶつつけあひ、鼻と咽とをくっくつと鳴らしてゐました。私は、兵隊たちがすむのを待つて、最後にそれにならひましたが、それまで我慢するのは、ずいぶんつらいことだつたのです。——水は、最初の數滴がやつと唇をしめすだけでした。次の數滴も喉を通らないうちに、舌の上で乾

いてしまつたやうです。そして、それがそろそろと喉にしみて来た時に、私の眼には、あたりにあるものの何もかもがただもう美しく、ゆたかで、恵み深いもののやうに見え、涙さへこぼれさうでした。ごつごつした岩壁でさへも、私の唇と頬と兩手に、ふつくらした母の乳房のやうに感じられたのです。それは、水のしみ出てゐる周囲が多少苔むしてゐたからばかりではなかつたやうです。かなり喉をしめしたあと、一息つくために立上つて空を仰ぎましたが、その時の蒼さは、今に忘れられないほど深く美しいものでした。

×
かりした話をきいてから約一年、最近その勇士は久方ぶりに私を訪ねて来て、首を垂れながら、いかにも感慨深さうに話した。——
「いつか、私は、夜襲の直前に、ほんたうの自分といふものをつかんだやうなことを申しましたが、この頃それが恥しくてなりませんでした。歸還後、もうそろそろ一年半になります。この一年半を顧みて見ますと、あの時、塵あくたのやうなものだと思つたものが、いつとはなしに私の心の中にのさばつてゐて、

最近では、やはりそれがほんたうの自分ではないかといふ氣さへしてゐるのです。いけない、いけないと思つても、自分ではどうにもなりません。

考へて見ると、自分の力といふものは弱いものです。いくらじたばたして見たところで、自分だけの力では、自分ひとりの始末さへ出来かねるのです。今から思ふとあの時、あれほどの氣持になれたのは、戦場といふものの力が働いてゐたからだと思ひます。いや、戦場といふものをとほして、何か目に見えない力が、私をほんたうの世界に呼びよせてゐたのです。岩壁の水に喉をしめして、しみじみ天地の美しさ、豊かさ、恵みふかさを感じた時だつて同じことです。ああいふ境地は私自身の力で得られたものではありません。やはり目に見えない力が、私の喉の渇きをとほして働いてゐたのです。

私は、このごろ、その目に見えない力を信ぜざるを得なくなりました。そして、たとひ塵あくたのやうなものが、ほんたうの自分であらうと、目に見えない力を信じてさへ居れば、それでいい、それで自分にはほんたうの

智慧も勇氣も恵まれるんだ、といふ氣になつて來ました。その信仰が、どうなり私を落ちつかせてゐます。動搖しがちな私の心にをりをり靜かな内省の機會を與へ、不平を鳴らしがちな私の心に、乏しい物を合掌していただく習慣をやめさせないのも、全くその信仰のおかげです。

おそらく、私のほんたうの自己建設はこれから始まるでせう。夜襲直前のあの氣持、岩壁の水を恵まれた直後のあの氣持、さうしたものを常住に持ちつづけらるやうに、これからこそ、私は私の自己建設に精進して見たいと思つてゐます。いや、自己建設などといつては、いけませんでした。自己破却、いや、それもいけません。それも自力を過信する者の傲慢から出る言葉です。私としては、ただ祈りに祈り、拜みに拜んで、この身一つを大いなるものに任せきりにしたい一心だけなのです。

私は、勇士のこの最後の話から、今更のやうに「他力信心の建設力」といふことについて、思ひをいたさないではゐられなかつた。

(筆者は前台北高等學校長、作家)

書 生 謡 歌 の 頃

大 村 桂 巖

今日の青年は昔の青年と比較して餘程ちがふかといふは大した違ひはない。尤もこゝで昔といふのはそんなに遠い昔の意味ではない。私等の若い時分をいふのである。大體日清戦役から明治の晩年に亘る時代である。今日の青年殊に現下大東亞戦争の眞只中にある青年と明治、大正の青年とは相當の開きのあることはいふまでもないのであるが、しかし青年そのものの本領ともいふべきものは、それはさう時代に依てちがふものではない。青年とはどんなものかといふ間に對する答としては現下大東亞の戦士としての青年にしてもが、そこに時代を超越し、否な古今に一貫して潜流せる青年としての特殊性、獨自性といふものは大體に同じである。主たる共通點は變らないと言つてもよい。だから此點を先づ十分に認識してゐないと今日の青年觀に就ても正鵠を得ないことになる。又青年と言つても十四五歳から十七八歳へか

けてのものと、二十歳以上のものとは大分ちがふ所がある。多くの青年會といはるゝものは寧ろ二十四五歳以上三十四五歳までのものが中心を占めてゐるからこれらも念頭に置いて觀別しなければならぬし、又其進路道程の上に於ても中等學校へ進學したもの、國民學校だけで社會へ出て働いてゐるものとあつて所謂學徒としての青年と一般社會の青年とはちがつて居る所があるし、高等專門學校の生徒や大學生となると又そこに一の特殊性を有つてゐるから、一般社會の青年とは一寸そりの合はない所もある。だから青年の今昔と言つても、それらの諸點を一々こゝで區別して行くべきであるが、今は紙數が許さぬからそれらをこゝでは一所くたにしてすまして行かうと思ふ。

○ 私は十六歳の時に國を出て名古屋の淨土宗の中學校へ入學し、その寄宿舎に入つて三年間

を過ごした。卒業後十九歳の秋、東京に上つて淨土宗の大學に入つた。名古屋へ行つた時は日清戦争の終つた直後で、まだ一戰時氣分が國內に横溢してゐた。第四師團長桂太郎中將が初代の臺灣總督となつて赴任するといふのでその時には吾々宗教學校の生徒も皆大練兵場に集まつて、無慮十萬の兵隊や學生や官民公私の群集が萬歳々々と之を歡送したものだ。非常に盛んなものであつた。その頃はうどんが一杯五厘、アイスクリームが一杯五厘、饅頭が一錢に五個一箇月の寄宿舎の食費が大枚金貳圓也といふ鹽梅だつた。日清戦争の結果折角我がものと思つた遼東半島が三國干涉の爲に取り返へされたといふので國民の憤激は言語に絶し、全く怒髮冠を衝くといふ忿々たる氣持は、何とも形容すべからざるものであつた。況んや青年に至つては起つても居てもゐられぬ、納まりのつかぬものがあつた。かうなると青年の鬱憤をはらす途は歌ふより他に道がない。青年の特徴の一つは大に歌ふといふ所にもある。尤もその時分は青年といふ語は餘り一般に使用せられてゐなかつた。當時は書生々々と呼んだ。書生といふと學生のことになるが、まあ當時の青年は學生が代表してゐたと言つてもよい。さうして學生とい

はずに書生とか書生さんとかと呼ばれたものだ。書生々々と輕蔑するな、佛蘭西のナポレオンも元は書生、又見よ大隈秀吉を……」など、歌つて意氣を揚げたものだ。そこでその時分、戦時氣分も多分に影響して書生劍舞とか書生芝居など、職業的新劇も現れて來た。青年即ち書生は勿論大に劍舞をやつた。劍舞大流行だつた。吾々も三國干渉の鬱憤を詩吟や劍舞ではらしたものだ。一起つて海岸に到り上海を見れば、左に獨佛、右には露西亞、我れに草薙の寶劍なきにあらず。斷然拂ひ盡さん彼等虜賊を」といふやうな調子で當るべからざるものがあつた。

○ 私が笈を負ふて東京に上つたのが明治三十一年の九月であつた。東京へ來て見ると流石は書生の本場だと思つた。全く書生の幅の利くことは驚くべきものであつた。さうして書生の權威とでもいふか矜持といはうか素衣破帽、鬚すべで纏ぎ合はした小倉の破れ袴に、山桐の薩摩下駄で大道狹しと闊歩して行く。中には太いステッキをつくといふよりはごろ／＼引きずつてあるくといふ始末、最も激しいのが早稻田の學生だ。當時はまだ大學でなく東京法律學校と稱した。鬚カラの隊長が早稻田の書生さん、そこへ

行くと應應の方は紳士の臍といふので何となく英國的自由主義の臭味が濃厚で少しきざな所があつて、書生の定義には餘りにくいものがあった。尤も中上流の子弟が多かつたので少し嫉妬的な見方もせられてをったのである。一高も鬚カラの一城廓を築いてゐて一方の特色ある書生王國としてデカンショ／＼で鳴らしてゐた。

大體、書生といふ語の起源は貧家の子弟が、志を立て、苦學力行以て立身出世をしようとすに、いふ所に眞骨頭があつたのだ。だから書生といへば貧乏學生といふ異名のやうでもあつた。しかしその貧乏學生といふ所が又彼等の矜持であり自慰でもあつた。だからすぐ佛蘭西のナポレオンとか又見よ大隈秀吉をと歌ひ出す。伊藤(博文)公はどうだ、大隈伯(重信)はどうだ、皆足輕士族の貧乏者の子孫だつたぢやないか。星亨でも高橋是清でも皆玄關番をしてゐた書生だつたぢやないか、と言つた風で、その頃私を知つてゐる友人でも玄關番やお寺の手傳をして學校に通つてゐたものも少くなかつた。中には夜俵を引いて學費を作つたものもあつた。私の親友の中にもそんなのがあつた。一人はそれが爲めとう／＼墮落してしまつたし、一人は帝大を卒業はしたが、高等學校からその爲に臍の病

氣が出て學士の免狀を手にして、間もなく死んでしまつたのもある。

○

一般に青年の意氣は旺盛であつた。立身出世主義だと言はゞ言ふもの、仲々勉強したものだ。笈を負ふて帝都へ上る、といふのが天下の青年の誰もの希望であつた。所謂燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんやで、神田の古本屋はいつも青年で埋つてゐた。男子立志出郷關、學若不成死不歸とか、醉枕竊窺美人膝、醒握堂々天下權と歌つては、將來を夢み、虹のやうな望を抱いて勉強した。又藝者なども之を煽て、末は博士かね大臣か國會議員か頼もしや」など、歌つたものだ。

當時の青年が立身出世主義だつたといふことは今日特にやかましく言はれ出したが、それは大體誤りなからうが、しかしさう一概に許りは言ひ去れない。七百年の封建制度の夢破れて土農工商の階級的社會は打壊され、誰でも力次第で大臣にも富豪にもなれるといふので、獨立自尊の風潮溢し、海外留學の志強く弱肉強食、生存競争の新時代の潮流に棹さして、世に立ち名を揚げようと一意邁進したことは事實であるが、さりとて忠君愛國の精神が冷却してゐたと

か、無かつたとかといふやうなことは断然ない。前にも言つた如く日清戦争の三國干渉に對する憤激、それから日露戦争に於ける媾和會議の結果が償金一文無し、又その原因理由が結局我が國力の弱勢にあつたといふやうなことで、國民殊に青年の慷慨悲憤と反省自覺とは、切齒扼腕、臥薪嘗膽、老も若きも一に國力の充實に邁進することとなり、學に行に、勞働に殖民に、あらゆる方面から母國の繁榮、日本民族の發展の爲に總てを結集するといふ意氣込はすばらしいものがあつた。

○ 當時青年の憧憬の的となつてゐたと言つてもよい高山樗牛が雑誌太陽に於て、盛に日本主義を高調し、又杉浦重剛、三宅雪嶺一派は新聞日本を出して之と相和したので、青年の健全分子は我が皇國の現状及び將來に對する大なる關心を持ち、國の爲に學び、國の爲に働くのだといふ自覺、自尊心を陰然と確持してゐた。又戸水寛人の「バイカル以東」といふ主張がこれ亦眼を世界に走せてゐた青年をして滿洲の將來に向つて既に思を廻らさしめてゐたのである。勿論一方に自由の思想も澎湃として國內に瀰漫してゐた。

慶應は獨立自尊を看板に立てゝゐたし早稲田大學にしても、學の自由獨立を歌つてゐたのである。當時の帝大は、官學の本山とあつて、帝國大學といふ看板に相應しく勿論官僚式であつたけれども國家的精神に充ちてゐて、七博士の如きが一層この熱をたぎらした。けれども帝大と雖も新時代の自由の空氣は學内の隅々まで感染し浸潤してゐたのは言ふまでもない。又立身出世主義が個人主義と成り勝ちなのも當然である。

故に自由の風が國內に吹き荒んでゐたことは否定出来ない。個人主義、自由主義の下に學問も職業も左右せられてゐた。だが、こゝで考へなければならぬことはかくの如き狀態下にあつたからと言つて、我が大和魂とか日本精神が青年の頭から全然脱け去つてゐたと見ることは、餘りにも民族無自覺的批評眼だと言はなければならぬ。

彼等は常に歌つた「西郷死せしも彼が爲め大久保死せしも彼が爲め……」とか又「立てるは東郷司令長官、きさらぎ八日早手の如く……」とか、讀書にも散步にも旅順港を忘れず、日本海を回想し、朝鮮を睨み、滿洲を睨み、支那を睨み、露西亞を睨んで即ち大東亞を睨んで、我

が皇國の大御業と國民の大責任とを忘れなかつたのである。日本民族の血を漲らしてゐる。我が同胞の血潮の中、この骨の髄の中には、處してこの忠君愛國の底流潜動が止んでゐるといふことはない。多少そこに四圍の狀態と時代の思潮とに依つて干満、淺深の循環、消長を見ることであつたことは遺憾ながら私も認めてはゐるのである。

(つづく)

篤志寄附

金五圓	富山縣米見郡佛生寺村	米用	吉雄殿
金五圓	北海道札幌郡手稻村字東	長島	アキ殿
金參圓參拾貳錢	芝區芝公園五號	赤神よし子殿	
金參圓參拾貳錢	茨城縣多賀郡那	川波	舜民殿
金參圓參拾貳錢	金澤市高道新町	心蓮	寺殿
金參圓	金澤市材木町二ノ三五	泉	貞次郎殿

信 仰 相 談

(擔當) 中村辨康

體あたり精神と

浄土の信仰

(問)

よく「死を見ること歸するが如し」と云ふ言葉が使はれて、昔の武士道精神として、或はまだ出陣に望んでの士心の掛として言ひなされて来て居り、殊に葉隠論語には「武士道とは死ぬことと見つけたり」とあつて、近頃でもよくこれらの言葉が使はれて居りますが、今ではそれ以上に神風隊や萬葉隊やその外の特攻隊が必死必中の體あたり精神を以てむしろ正しき「死」こそ「眞生」であると考え「行つてぶつかつて本當に生きるのです」と言つた若鷲もありましたやうに、この體あたりの精神こそは誠に「神の心」であり、また佛教に求むるところ

の「生死解脱」の心境であると確信いたしますが如何でせうか。若し果してさうであるならば、何もわざ／＼坐禪をしたり念佛したりして「死生達觀」の修養をする必要はあるまいと思ひます。日本人である限り恐らく誰でもこの精神にあると思ふからであります。して見ると我々日本人には敢へて佛教などはいらないのではないでせうか。況して「念佛の信仰」は自分の死後の安住を求むる即ち「浄土往生」を目的として居りますから、個人的な考へであつて、かうした體あたり精神とは縁遠いやうにも思はれます。或はイヤ「往生」と云ふことが「死ぬこと」ではなく「往き生くること」だと仰しやるならば、そんならまた念佛の必要はないのであつて、私達は何處までも此の日本的な體あたり突込

み精神で行けばよいのでありませう。何も廻りくどくゴテ／＼とヒチ面倒な信心だの三心だの四修だのとならべ立てる必要もあるまいと思ひますが如何でせうか。これらの點について私達素人にも納得の行くやうな委しい御指示をお願ひいたしたうございます。(熊本・菊池・愛讀者より)

(答)

御尤ものお買ねです。一一御同感でございます。誠に宗教の信仰が觀念の陶醉に終るやうでは本當のものではありませんまい。されば人生理想の實現こそは正しい宗教の求むるところであり、正しい信仰の念願であります。三心と云ひ四修と言ふのも畢竟はそこをねらつて居るのではありますまいか。

抑も佛教は覺醒教であつて觀念教ではありません。止觀と云ふやうな觀念を凝す教もありますが、それは一つの手段として用ひられた迄のもので、目的は「慧」即ち眞實智にあるのであります。然もその眞實の智とは個人の心境だけで言へば菩提涅槃であつて、菩提即ち覺醒に基く「生死解脱」即ち涅槃の心境に達することでありまゝ。と言つてそれは決して寒巖枯木底のものではなく切れれば血の出る煩惱もあれば生死もあるものであつて、唯だ異なるところは何時でも何時でも煩惱を菩提とし生死を涅槃と化し得る力を有することでありまゝ。若し煩惱もなく生死もなければそれは木佛金佛か土偶の如きものであつて生きた人間ではありません。昔は何でも彼でも常人と異なる雲の上人の如くにデツチ上げなくては氣がすまなかつたらしく、悟りの心境は感情も何も起らない寒巖の上の忽然として立つて居る枯木のやうな状態であるかのやうに誤解するものが多かつたのですが、決してさうではないのであります。御質問の中にあるやうに若い神鷲達の心境と異なるもの

ではありません。唯だそこにはハツキリ認識されて居るか居ないかの相違があるだけでありませう。ですからこれら神皇達が事實に於て坐禪も念佛もすることなくして然かもからした心境にもなつたのであつて、此點は御質問の通りであります。

然しながら何がこの神皇達にかうした心境を興へたかと申しますれば、それは正しくは國體の賜物であると同時に、第二には祖先以來の傳統と遺傳との賜物でもあると信じます。

元來人は獨り立ちのものでありませんから實は個人と云ふものはないのであります。私と云ふ一個の人間も父母祖先の集積であり民族の一部分であり國家國體に何千年となくはぐくまれ育てられて來たところの固理修成のひとつそのものであります。ひは日、火、靈、陽など云ふところの「ひ」でありとは迹、戸、門などの「と」であ

ります。かゝる日本語が示すやうに、私一個人と云ふものの戸を開き門を開いて見れば、その奥にはよりよくより大なるものが見えるのであります。私はそれらの迹であつて、集國の一部分であると共に、その集國が幾千年來集積したところの一標識でもあるのであります。ですから實は個人主義思想と云ふものは成立つ譯がないのであります。今の菩提涅槃にしましてもまたは質問の往生思想に致しましても個人的なものは正しいものではあり得ないのであります。即ち凡ては民族に影響し國體に影響して居るのであります。若しその民族が盛衰興亡常ならざる國に生存して來て居るものならば、そこに何の安定もないから、その民族の抱く理想は個人的な觀念だけであつて具體的の體験はあり得ません。それで結局その理想境を宗教の中に求め、個人の信念の中に天國とか又は悟りとかして求めて

行つたのであります。然るに我が國は千古萬古一貫してかはることなき世界無比の國體を持ち、萬世一系ゆるぎなき御皇室を頂いて居りますから、具體的に無量壽無量光たることを見聞するばかりでなく、親しくその中に哺まれ育てられて居るのであつて隨つて宗教も無窮國家を理想とする淨土教にまで發達して來たのであります。然かも永い封建時代を過ぎて來ましたけれども、その間には信仰として私達の祖先の心の中に理想國體觀を維持し傳承して來たのであります。即ち鎌倉足利戰國徳川と七百年の永きに亘つて國體の尊嚴がかくされては居りましたけれども、思想として宗教信仰に依つて育てられつゝ、それが意識の上にキワダツテ認識されなくとも、事實上御仁慈の皇徳の無量壽光の中にひたつて來たからこそ佛敎や淨土の信仰を通して、この「國體」の大生命の中に生きゝこ

そ本當の生であり本當のいのちである、おのづからに傳承され遺傳されて來たのであります。例へば禪にしましてもその中には顯はな意味に於ての國家意識はありませんけれども、主人への忠誠をつくすことに「眞の生命あり」として、生死に對する正しい認識が養はれて來たのもあります。されば現段階に於ける私達日本人は成る程直接的には宗教に觸れて居ない人が多いかも知れませんが、且つ遺傳されて來た信仰思想的觀念が、滿洲事變以來漸次促進されつゝ此の大東亞戰爭に及んでは、頗る發達し來り、遂に比島決戰の好機を得てその全貌を發揮することにもなつたのだと考へます。元より「維神の大道」がその根幹であり、この無比なる國體に育てられたればこそであります。思想的に正しく祖先が承け入れて來た淨土的信念が無意識の中にそ

の考へを太らせ實らせたと考へられます。

此意味に於て佛教殊には淨土信仰は此の日本的な體當り精神と最も深い關係を持つものであるであります。

滅私奉公に徹す

いづれをみても事實よくやつてゐる。人手が足らぬ、資材が乏しい、輸送がきかぬと云ひながら、各々何んとか工夫してよく克服してゐる。それにもかゝらずこれで満足だ、十分であつたとは云ふことが出来ない。何故だらうか。いま老若男女を問はず、前線勇士の心を心としない者は一人もゐない。誰もが勝ち抜くために精進しお國に盡す眞心に燃えてゐる。それなのに何とか改めたいことが目につく。何故だらうか。

こうした疑問はもちろんよくわからぬ。だが一つ滅私奉公の精神が足らぬことを挙げ得られると

かの山中鹿之助の

一番槍は我慢にてはつけぬものなり。始めは神號と共に突き入りしが助かる心あり危し。終に意を決して南無阿彌陀佛の聲と共に突入ることを得たり

思ふ。こうせぬばならぬといふことが、いざ自分の會社、自分の隣組、自分の家のことになる案外やらなかつたり、間違ひを見逃し易いものであとにこれでは折角のことが何んにもならない。否逆にこれがために幾多の隘路や不合理が生れて来る。

特攻隊の若櫻〇〇中尉が「編隊を組んでゐる時は多少氣おくれもするがいざ單獨となれば矢でも鐵砲でも何糞です。やれますよ」と淡々と己が命をお國に捧げる「死」の自信を語つた。こうした滅私奉公に徹した心、自分獨りの方がかへつて一死以てお國に捧げやすいといふことをもつとよく味ひたいものである。

と云ふ言葉は、明らかに淨土信仰の「死生を超越して眞の生に轉換せしむる」淨土往生の消息を物語るものであつて、體あたり精神を發揮する最も捷徑がこの念佛の信仰であることを教ゆるものであります。

されば淨土の信仰は此の體あたり精神の裏付けとして最も必要なものであつたことがお分りにならうかと存じます。

況してかうした危急存亡の時でない平時に於て、この體あたり精神を養ひくれるものは誠に我が淨土の信仰であつて、しかもそれが國體的宗教として最も手取り早いものであることを知るべきであります。

かの三心四修の沙汰の如きはその時の用意として心理的に必要なものであります。但し「往生」と云ふことを存在觀の上に立つて考へて居る人にはハッキリしないところかも知れず、恰かもそれは無關係の如く思つて居られるかも知れません。云ふことをはきちがへて居るからであります。信仰への入門として有相單着は大切な手段でありませうけれども、有相は信執の本質ではありませんし、また執着も信仰そのものではありません。

觀無量壽經の中には「教我思惟教我正受」と云ふことばがあります。この思惟は「有相」の定善十三觀であります。要するに手段であつて、正しき定善の目的は「正受」でなければなりません。正受こそは「無生忍」であり生死達觀であり無執無着でありそして「生の生」の認識であります。

このことはハッキリさせるには相當の紙數を要することであつて以上申し上げただけではまだ充分御理解も困難かと存じますが紙數を超過いたしましたから大體これだけで今回は御ゆるしを願ひたいと存じます。



淨土宗の鍊成思想

(二)

大野 法道

行の問題について、淨土宗義には求心的の立場と遠心的の立場とがある。

行の中心を求めるのが求心的の立場であつて、それは法然上人の選擇集の第二章に説かれるやうに、行を正行と雜行に分けてその得失、つまり長所と短所を挙げ、正行の五種（淨土三部經を讀む讀誦正行、極樂淨土の莊嚴や阿彌陀佛を觀する觀察正行、阿彌陀佛を禮拜する禮拜正行、念佛する稱名正行、阿彌陀佛を讚歎し供養する讚歎供養正行）を尊び、更にその中でも特に第四の稱名正行たる念佛を正定業として選立し、極善無上の行ここにありとするのである。他の諸章にも専ら念佛の功德を讚揚し、正行已外の雜行を棄捨するのである。かうした求心的の立場は、つまり宗教的に生活の根を下ろして専修一行を持つところに眞人生の礎石成るを説くのであつて、歸一なき放漫なる生活の弱體に墮するを警策するのである。選擇集の始めに表題の次ぎに「南無阿彌陀佛」と念佛を挙げ、「往生の業には念佛を先とす」と註してあるが、「先」は尖であり尖端であつ

て、行の求心の徹至するところ、淨土の行の切つ先の但念佛にあることが告げられてゐるのである。

選擇集の第二章に更に往生禮讚を引用して、中心なき雜種の行に彷徨するは十三の失（一に雜緣亂動して正念を得ず。二に佛の本願と相應せず。三に教に違ふ。四に佛語に隨順せず。五に係念相續せず。六に憶想間斷す。七に廻顧殷重眞實ならず。八に貪瞋諸見煩惱來つて間斷す。九に慚愧慚悔心なし。十に相續してかの佛恩を念報せず。十一に心に輕慢を生じ名利と相應す。十二に人我覆ひて善知識に近づかず。十三に往生行を障ふ）とし、それを結んで、私（法然上人）に云はく、この文を見るにいよく、雜行を捨て、専修を修すべし。豈百即百生の専修正行を捨て、千中無一の雜修雜行を執せんや。

と云はれてゐるのは、實にこの求心的立場にある念佛の選立を示すもので、専修の歸一に生活の根幹たる生命の樹立があるから「百即百生」の確實さがあるのである。

記主上人が選擇集の大意とし、その書一部の要領を盡す

ものとして指摘せられた集の一節に、

計也、それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の聖法の中には、且く聖道門を開きて選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雜二行の中には、且く諸の雜行を抛つて選んで正行に歸すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中には猶ほ助業を傍らにして選んで正定を専らにすべし。

とある所に最もよくかうした求心の方向が顯はれてゐる。

生活に純一の根幹が樹立すれば、それが健全なるかぎり、おのづから枝葉がしげり、よく春夏秋冬の四季の掟に順つて花が咲き實を結ぶ生活の営みが顯はれる。即ち念佛の一行はよく日常の萬事を指導し、かぎりなく放射して盡きず、佛の萬徳こもる一行は百般の生活の基體となつて作用する。これが遠心である。法然上人の言語に、

三途（地獄・餓鬼・畜生）へ歸るべきことをする身をだにも、捨てがたければかへりみはぐくむぞかし。まして往生すべき念佛申さん身をば、いかにもはぐくみもてなすべし。念佛の助業ならずして今生のために身を貪求するは三惡道の業となる。往生極樂のために自身を貪求するは往生の助業となるなり。

とあり。禪勝坊が「現世をばいかゞ計らひ候べき」と問ふたのに對し、

現世を過ぐべきやうは、念佛の申されん方によりてすぐべし。……總じて之を云はゞ、

自身安穩にして念佛往生をとげんがためには、何事も皆念佛の助業なり。

と答へられた。「何事もみな念佛の助業なり」の一語は、行の絶大なる抱擁であつて、一切の行はこゝに於て念佛の遠心の内容として統攝せられるのである。行の分判に於て、雜行として棄てられたものが、こゝではその全部はおろか日常のあらゆる生活行動までも含めて、すべて助業として更生し取用されるのである。かくして念佛に立つ信仰生活は、いかなる事にも妨げられぬ無礙の大道であり、しかもそれはたゞ徒らにそゞろに廣がるのではなく、人事百般の生活の姿に於て、必要に應じてゆるやかに擴充せられてゆく統一態を成すものである。念佛を申しつゞけて相續する鍛鍊は行の求心の鍊成道であるが、遠心に於てもまた鍊成のこゝろがあることは自ら明らかであらう。即ち念佛を根として生きるのであるから、あらゆる行為言動の上に、その枝葉花果のすがたが、どこまでも擴げられるつとめがあるといふに、日に續けざまに繰り返される内外の生活に於て、ゆるかせならざる深みがいよく加へられてゆくであらう。かくて生活はゆるぎなき礎石の上に、不斷に鍛鍊さるべき鍊成道を説くのが淨土宗である。

○郵税と會費○

御後援の程感謝いたします。郵税改正により本誌一部の送料が四月から五錢になりましたので、

會費一ヶ年 金二圓四錢

となりました。従つてすでに御納入分の會費については、當方で計算いたし、郵税不足分を頂きますので、多少前金切れが繰り上がります。何卒御諒承下さい。また前金切れに際しては葉書不足のため従來のやうに一々御通知致し兼ねますので、本誌帯封の上に「前金切れ」と捺印いたし御通知にかけますので、右お含み下され會費をお納め下さい。

また用紙も段々窮屈になつてきましたので、會費御納入なき方には本誌の發送を止めます。そして改めての御入會は都合によりお願ひ出来兼ねますので、前金切れに際しては遅滞なくお納め下さるやう願ひます。(係より)

送料の改正

四月から郵税が改正になり、本會發刊書籍の送料が左記の通りになりますので、何卒お含みおき下され御送金の程願ひ上げます。

- 法然上人を憶ふ 林 靈 法著 定價三圓 送料四十錢
- 行誡上人 増谷 文雄著 定價一圓五十錢 送料三十錢
- 信仰問答 中村 辨康著 定價三圓十五錢 送料四十錢
- 法然の教とわが國體思想 山本 幹夫著 定價二圓二十錢 送料四十錢
- 法然上人の和歌 安西 覺承著 定價五十錢 送料十錢
- 日常勤行式 領價八十五錢 送料十錢

歌壇と俳壇

歌壇と俳壇を都合により本誌だけ休載致しました。來號より引續き掲載いたしますので、ぜひ御投稿願ひます。

編輯後記

◆本會は法然上人の御遺徳に生き信念の涵養に努め、以て時局下最も必要な戦時生活の基調をなす精神力を振勵すべく微力をさしげてきました。

◆各先生方の御教示、會員各位の御後援により天業翼賛みるべき成果を挙げつゝあります。

◆しかしながら近來物價の騰貴、輸送の不圓滑等により本會經營も漸次難しくなつてきました。本誌定價は實費よりも低廉なのであつて、足らざる所は宗務當局の補助會員各位の篤志寄附で賄つてゐます。この上ともに御聲援願ひます。

◆吉田絃二郎先生は相變らず御元氣ですが、親交厚き大島法主の御遷化に力を落してをられました。

◆下村湖人、大村桂巖兩先生と奇しくも著名な教育家の寄稿を忝なくいたしました。

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和二十年二月二十日印刷納本
昭和二十年三月一日發行

(定價十二錢)

東京都芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野 正順
發行人

東京都芝區芝公園十五號明照會館

印刷人 村瀬 秀雄

東京都牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二二五一七八

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢 (送料二錢)

會費 一ヶ年 金一圓六十八錢 (送料共)

振替拂込みはすべて十錢増のこと